深津地区遺跡群

—昭和60年度県営圃場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査の概要—

付篇　西迎遺跡Ｋ１

1985

群馬県勢多郡粕川村教育委員会

深津地区遺跡群

—昭和60年度県営圃場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査の概要—

付篇　西迎遺跡Ｋ１

序

粕川村における、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も７年目を迎えるに至りました。これまでの発掘調査で得られた資料は、学術的に貴重なものであるとともに、粕川村の隠れた歴史の断面を私達に垣間見させてくれます。

今回実施した深津地区（14工区）の発掘調査では、県内で初めての確認となる弥生時代終末期の環濠集落や、従来、赤城山南麓地域では調査例の少なかった弥生時代中期後半の集落などが検出確認されています。これらの資料は、粕川村が弥生時代という農耕社会の形成期に、群馬県にあって、極めて重要な位置を占めていたことを物語っています。

私達は、こうした発掘調査による資料を、より有効に活用していきたいと考えます。粕川村の将来を担う子供達や村民のみなさんに、粕川村の歴史を知っていただくとともに、粕川村の本当の姿を少しでも理解していただき、郷土「粕川」を愛する心を育んでいただけたらと考えます。

今回は、まだほとんどの資料が整理途上ということもあり、今年の発掘調査の概要を述べ、詳細は後日の本報告に譲るということで御容赦願いたいと思います。

最後に、今回の発掘調査に際し、多大な御理解と御協力を賜った地元土地地権者のみなさんをはじめとして地元土地改良区の役員のみなさん、さらには厳寒の中、発掘調査に従事されたみなさんに感謝申し上げて序といたします。

粕川村教育委員会
教育長　金　井　久　雄

目　　次

序

例　　言

I　発掘調査の経緯 …… 3

II　発掘調査の概要 …… 5

1．西迎B遺跡 …… 5
2．西原遺跡 …… 7
3．三ケ尻遺跡 …… 7
4．松原田遺跡 …… 7
5．三ケ尻古墳 …… 9

III　昭和60年度調査の成果 …… 11

付　　篇

西迎遺跡 …… 23

例　　言

1．本書は昭和60年度粕川地区県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査の概要を示したものである。

2．発掘調査を実施した遺跡は群馬県勢多郡粕川村深津字西迎1306―2地所在の西迎B遺跡、同深津字三ケ尻1111番地他に所在の西原遺跡、同三ケ尻1134番地他に所在の三ケ尻遺跡、同字三ケ尻1110―1番地に所在の三ケ尻古墳、同字松原田1780―2他に所在の松原田遺跡の計5遺跡である。

3．発掘調査は粕川村教育委員会が昭和60年度文化財調査国庫補助金及び群馬用水土地改良事業所委託金を使用して実施した。

4．調査は粕川村教育委員会の直営事業とし、同教育委員会社会教育主事小島純一が担当し、調査員として竹内寛、笠原仁史が専従した。

5．発掘調査は昭和60年9月21日より昭和61年1月11日まで実施し、その後は出土遺物の整理及び本書の作成にあたった。

6．発掘調査にさいし下記の方々より御指導、御助言を賜わった。ここに記して感謝申し上げます。

石井克巳　井上唯雄　岩崎泰一　内田憲治
柿沼恵介　小安和順　斉藤基生　坂爪久純
鹿田雄三　徳江秀夫　能登　健　原　雅信
前原　豊　右島和夫

Ⅰ　発掘調査の経緯

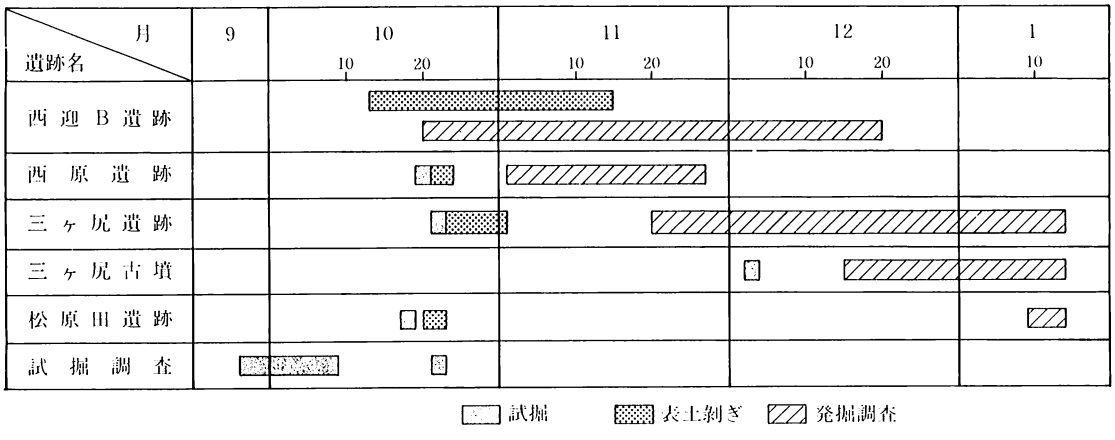
粕川村は、昭和53年度よりほぼ全村を対象として県営圃場整備事業が実施されてきた。それに伴って埋蔵文化財の発掘調査を毎年実施してきている。昭和60年度はその第７年次目である。

粕川村は、赤城南麓にあり埋蔵文化財の宝庫として知れている。これまでの発掘調査でも昭和56・57年度の２ケ年にわたって調査を実施した膳地区の白藤古墳群や昭和58・59年に実施した月田地区の縄文時代前期の遺跡群などを始めとして多くの貴重な資料が検出されている。

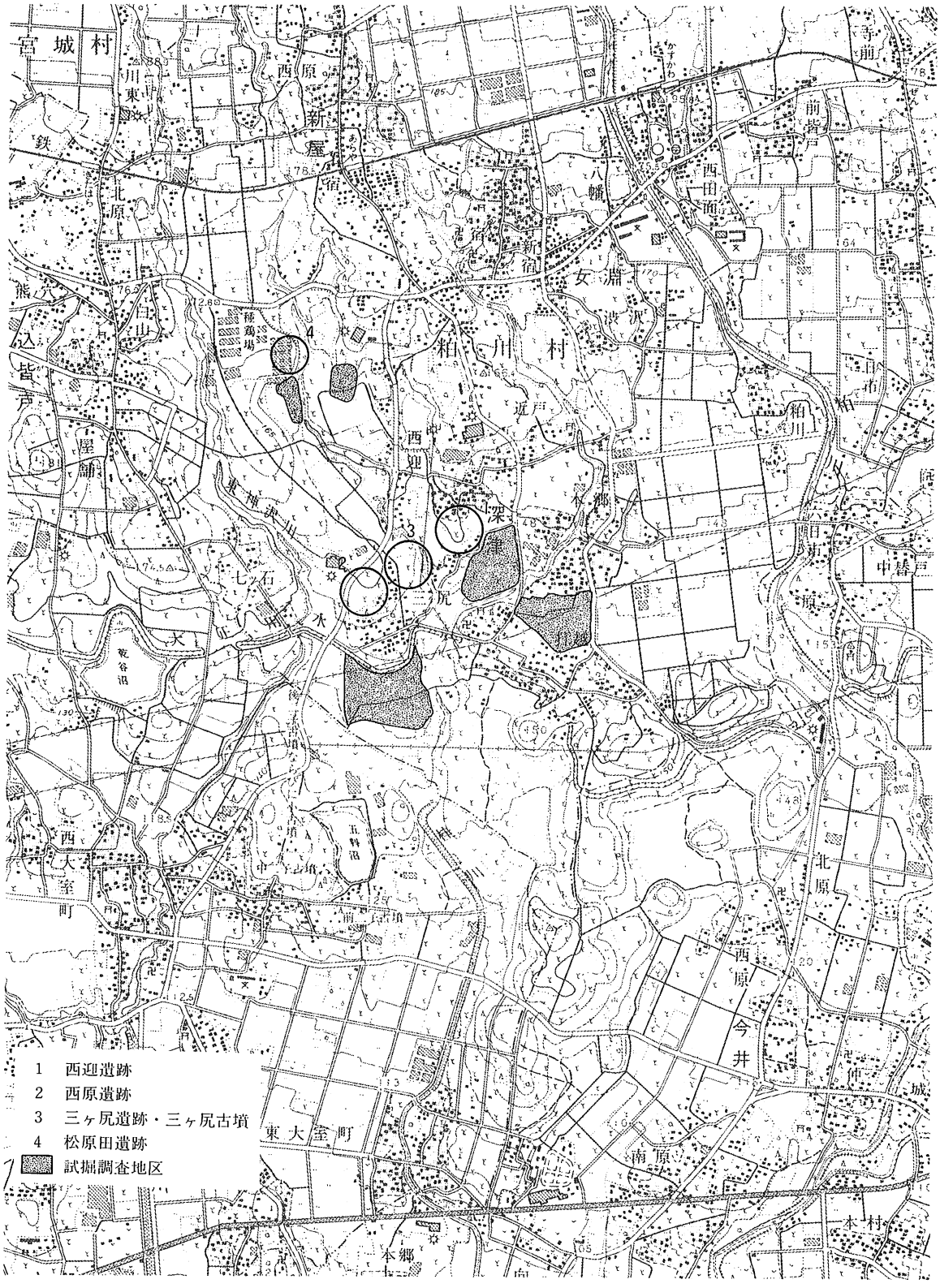
今年度は第14工区（深津三ケ尻・西迎地区）と第12工区（女淵八幡地区）が工事該当区域とされた。この該当区域に、分布調査の結果、年度当初には７箇所の埋蔵文化財包蔵地と１基の古墳の存在が予想されていた。当教育委員会ではこの分布調査の結果をもとに工事施行者である群馬用水土地改良事業所及び地元土地改良区との前後２回にわたる調整を行った。第１回の調整では確認されている埋蔵文化財該当地に対して工事着手前に試掘調査を実施することとし、その結果を待って要調査地区、現状保存地区の検討を行うこととした。試掘調査は９月27日より着手し、当初の埋蔵文化財該当地の内、４遺跡について調査が必要であることが明らかとなった。これをもとに第２回の調整を行い、試掘調査で確認された４遺跡については現状保存が不可能であるため発掘調査が必要であることが確認され、その後の具体的な工程について最終的な調整が行われた。工期について一番問題となった点は、発掘調査の最終期限であった。工事側は12月いっぱいでの開けわたしを要求したが、発掘面積、確認されている遺構の内容などから物理的に不可能であるため、調査終了後、随時工事側に開けわたすという条件で１月中旬ということで双方合意した。

以上の調整の結果、今年度の発掘調査は西迎Ｂ遺跡、西原遺跡、三ケ尻遺跡、松原田遺跡の４遺跡について調査を実施することとなった。しかし西原遺跡の調査途中で、最初近世の屋敷に伴う土墨と考えていたものが古墳であることが明らかになったためその調査も合せて実施することとなった。調査は昭和60年10月21日より開始し、昭和61年１月14日に総て完了した。

発掘調査面積は16,280m²、発掘調査日数は延85日参加作業員数は延3,476人であった。



第Ⅰ表　発掘調査進行表



第Ⅰ図　発掘調査遺跡の位置図

II 発掘調査の概要

1. 西迎B遺跡

(1) 遺跡の位置

西迎B遺跡は粕川村大字深津字西迎1306―2番地他に所在する。遺跡は粕川村の南西部にあたり、粕川扇状地面に残された洪積台地南端部の平坦面を占めている。遺跡の標高は147mである。遺跡の東と西は自然湧水の開析による谷地が形成され、南は桂川による段丘が形成されている。遺跡の在る同じ台地上には、10基前後の古墳から成る近戸古墳群や昭和54年に一部調査を実施した西迎遺跡が存在している。また、遺跡の東200mには中世古文書にしばしば登場する深津氏の居城と推定されている村指定史跡坂田城址がある。

(2) おもな遺構と遺物

西迎B遺跡では縄文時代の陥し穴状の土壙8基、弥生時代中期後半から奈良・平安時代にかけての住居35軒、古墳時代前期の方形周溝墓7基、時期不明の炭窯1基と大溝1条が検出されている。

縄文時代の陥し穴状の土壙は遺跡の西側台地縁辺部に散在して検出されている。

弥生時代中期後半の住居は15軒が調査地区の中央部に検出されている。これらの住居からは所謂「竜見町式土器」に比定される遺物が出土することより、ほぼ同時期の所産と考えられる。また、これらの住居は総て焼失家屋であった。これらの住居の内、第13号住居は調査区の中央部に位置し、東西長12m、南北長7m、深さ0.6mという極めて大型の長方形の竪穴式住居である。主柱穴は6本と考えられるが、みな比較的細いものであった。また、住居壁下には周溝が全周していた。床面は一部を除いて軟弱であり、住居中央に向かってやや下りぎみに傾斜していた。住居中央部床面には2個の炉石を持った地床炉が設けられており、炉床は良く焼けて赤化していた。また、住居北西隅よりの床面には直径45cm、深さ55cmの掘り方に埋設土器が据えられていた。これは底部を欠損した大型甕形土器の上に大型壺形土器の上半部を被せ、さらにその口縁部に底部のみの欠損品によって蓋をするというものであり、当該期には稀な例と考えられる。なお、住居埋土下層には浅間C軽石（As－C）を多量に含む層が認められた。

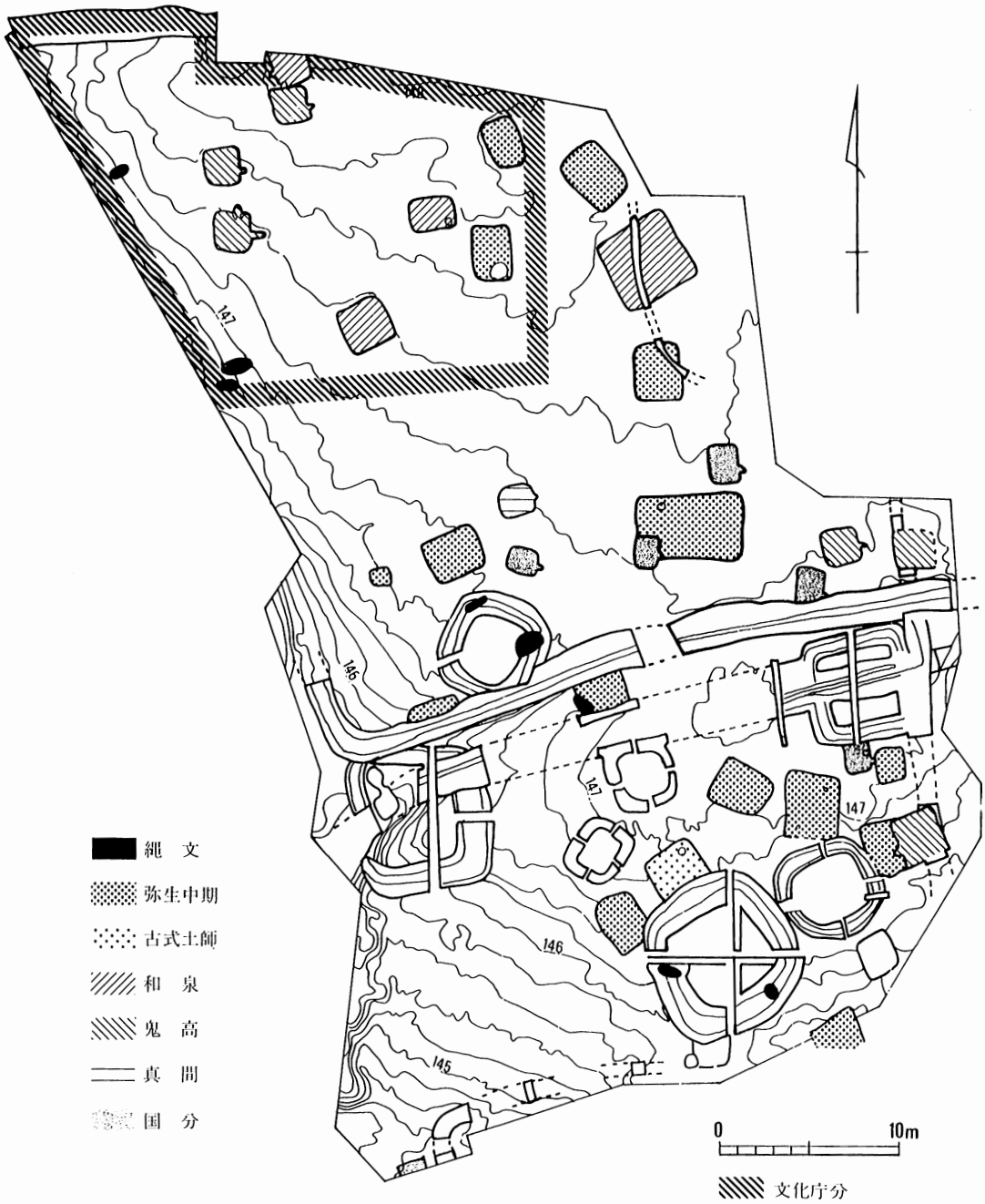
弥生時代後期から古墳時代前期にかけては発掘区南部で方形周溝墓が7基と住居1基が検出されている。住居からは樽式土器と古式土師器とが共伴して出土しており、弥生時代終末期の様相を示している。また一部を4号周溝墓によって切られている。

方形周溝墓7基はいずれも周溝が全周するものである。これらの内、7号墓の周溝埋土内にAs－Cの純層が確認されたが、他の6基については周溝内にはAs－Cの純層は検出されず、いずれもAs－C降下以降の構築と考えられる。これらの周溝墓はその規模により7～9m前後のものと4～5m前後のものとに分けることができる。

これらの中で特に大型の4号墓は、周堀の端から端までの長さで東西長16m、南北長17.5mであり、発掘調査前の現況でも墳丘の高まりを確認することができた。周堀の深さは最も深いところで1.4m、最も浅い所で0.8mである。周堀の断面形は外側の法面はなだらかに立ち上がるのに対し内側の墳丘側の法面はほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。そのため全体の平面形はやや中央部が膨らむ方形であるが、墳丘部は直線的な方形となっている。同様な傾向は他の2・3号墓にもみとめられる。

古墳時代中・後期の住居は発掘区北部に7軒と南東部に3軒の計10軒が検出されている。奈良・平安時代の住居は6軒が発掘区中央部で検出されている。

その他の遺構として炭窯と大溝がある。炭窯は発掘区南西隅に検出されたもので平面形は所謂ダルマ形のものである。大溝は発掘区西端を北から南に延び、発掘区中央で直角に折れ台地を切断して東の谷地へ抜けている。溝の上幅は4m、下幅は0.5m、深さ1.7mで断面形はV字状である。溝の両側法面には杭列と考えられるピットが多数確認できた。この溝は、この地に御倉屋敷があったという記録があるところからそれに何等かの関係があるものと考えられる。しかし、時期等を決める資料は出土していない。



第２図　西迎Ｂ遺跡全体図

2. 西原遺跡

(1) 遺跡の位置

西原遺跡は粕川村大字深津字三ケ尻1111番地他に所在する。遺跡は2㎞ほど北を走る県道桐生・前橋線付近より、北西から南東方向に延びる洪積台地の先端部に位置している。この台地は北から東にかけては石田川、西から南にかけては東神沢川によって開析され、南は沖積地へと緩やかに移行している。また、西では比較的深い谷を形成し、遺跡と5m程の比高をもっている。本遺跡と同じ台地上の北方500mには59年度調査の西原古墳群が位置し、県道深津・伊勢崎線を挟んで北側には56年度に調査を実施した後原遺跡が、また、西方500mには今年度調査を実施した三ケ尻遺跡が在る。なお、本遺跡は54年度に工場建設に伴い発掘調査を実施した、県道深津・伊勢崎線の北側に隣接する西原遺跡と同一の遺跡であると判断されたため54年度の遺跡名をそのまま使用することにした。

(2) おもな遺構と遺物

今回の発掘調査は、圃場整備事業により新設される幅6mの道路敷部分について発掘調査を実施することとなった。その結果、調査地区内に赤井戸式期終末期の住居5軒を検出した。さらに発掘区南端部近くで大溝の一部と考えられる落込みを確認した。この大溝についてはその延長方向に細かく試掘溝を設定することによりその走行を把握することができ、昭和54年度調査区で検出された大溝と接続することを確認した。また、周辺についても大溝の規模等の把握を目的として確認調査を実施した。以上の結果、本遺跡は弥生時代終末期から古墳時代前期前半の環濠集落であることが明らかになった。検出された住居からは赤井戸式土器、櫛描文土器、古式土師器の三者が共伴する、赤井戸式土器第Ⅲ期の典型を示す資料が多く検出されている。住居埋土には浅間山C軽石（As－C）の純層は確認されていないが、As－C を多量に含む褐色土によって埋没していた。環濠は上幅2m、下幅1m、深さ0.8mの断面台形のもので、底面直上の埋土には As－C の純層が確認された。また、環濠は南側に2カ所の出入口状の切れ目が確認された。本遺跡で確認された環濠と住居は埋土の状態や出土遺物などから考えてほぼ同時期に機能していたことが考えられる。

3. 三ケ尻遺跡

(1) 遺跡の位置

三ケ尻遺跡は大字深津字1134番地他に所在する。西原遺跡と同じ台地上にあり、西原遺跡の東側500mにあたっている。遺跡の東は石田川によって浸食されている。遺跡の東には幅100mほどの谷地を挟んで西迎遺跡が位置している。

(2) おもな遺構と遺物

本遺跡では41軒の住居と2基の方形周溝墓を検出した。41軒の住居は古墳時代前期から奈良・平安時代にかけてのものである。古墳時代前期の住居は8軒確認されたが、いずれも規模の小さなもので貯蔵穴や柱を持たない。炉跡も数軒で確認し得たのみであった。また、住居は調査区の北側に纏まって検出されている。さらに古墳時代後期から奈良・平安時代になると遺構数が増すとともに、遺構は調査区の全域に拡大する傾向を看取することができる。2基の方形周溝墓の埋土には浅間山C軽石　（As－C）の純層が検出された。

4. 松原田遺跡

(1) 遺跡の位置

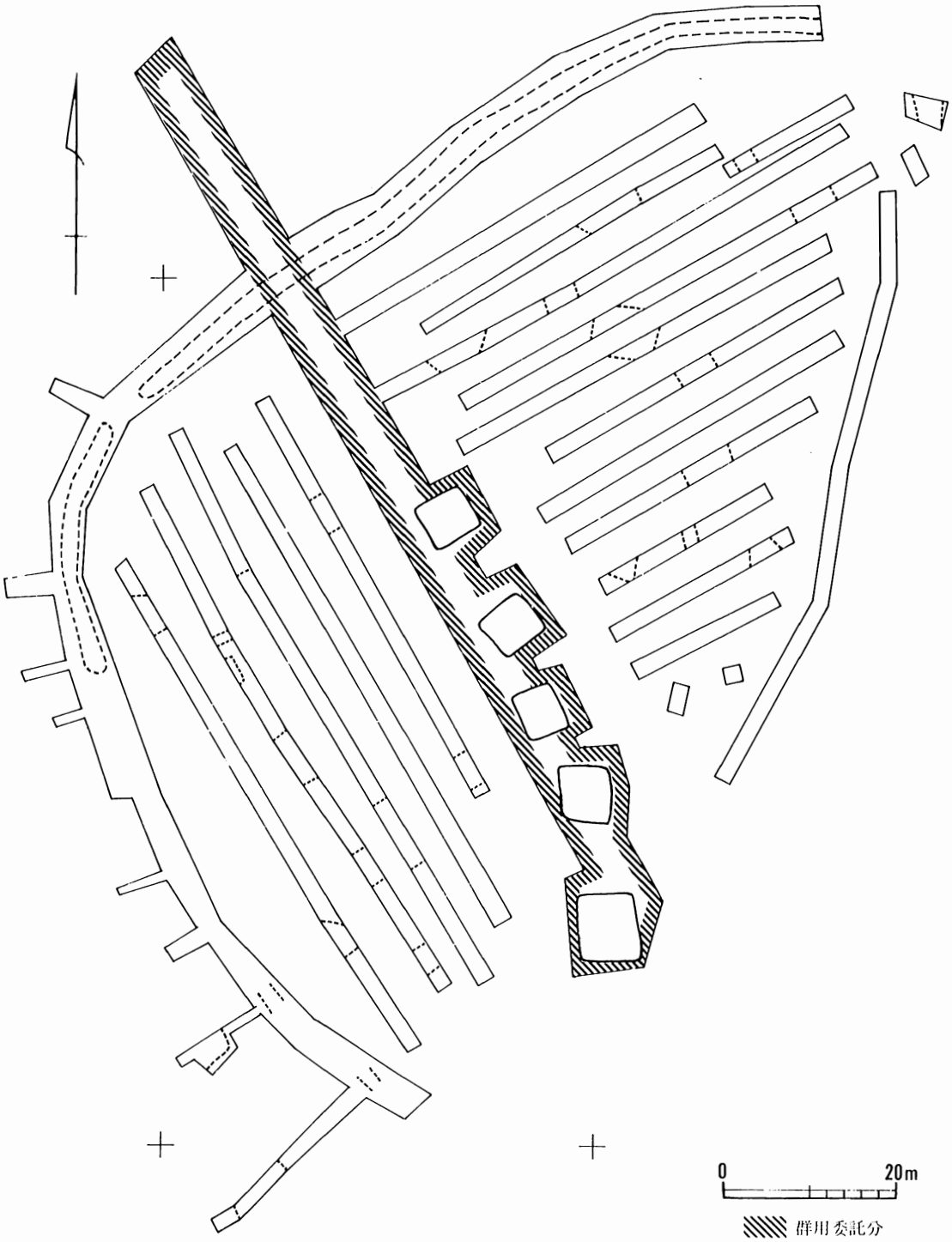
松原田遺跡は粕川村大字深津字松原田1780－2番地他に所在する。遺跡は石田川による沖積地内の、洪積台地と接する部分に位置している。石田川は侵食がすすみ河床が下がったため、遺跡は河岸段丘状の形状を呈する平坦地である。西は洪積台地が急に落ち込み、北から東にかけては石田川によって侵食され、特に東は3m程の崖となっている。

(2) 検出された遺構

本遺跡は以前から鉄屑の散布地として知られており、地元の人々からは「宝物山」と呼ばれていた。

調査は鉄屑を集中して出土する100㎡程の範囲を対象として実施した。

調査の結果、砂礫層を掘り込み、ローム土を貼り、さらに青灰粘土を用いた1.6m×0.8mの矩形の非常に良く焼けて赤化し、硬質化した部分とそれの両端に付設された直径3m程の不整円形の掘り込みを検



第3図　西原遺跡全体図

出した。また、その遺溝の南側に幅0.5mの溝状遺構を検出している。これらの遺構埋土には多量の鉄屑が含まれていた。特に不整円形土壙を伴う遺構からは大型の鉄屑が出土するとともに、焼土ブロックや粘土塊が多く検出された。

これらのことより本遺構は製鉄遺構としてとらえることができるのではないだろうか。一応、中央で検出された赤化した部分を炉本体と考え、長方形の箱形炉を想定しておきたい。稼働時期については浅間山B軽石（As－B）降下以降と考えられる。

5. 三ケ尻古墳

(1) 遺跡の位置

三ケ尻古墳は粕川村大字深津三ケ尻1110－1番地他に所在する。環濠集落の検出された西原遺跡の調査区の南端部で、三ケ尻の集落の北縁にあたっている。この周辺には青龍寺という寺が存在したという伝承や黒岩家の旧宅地跡であるという伝承が残っており、調査開始までは本古墳をそれらに関係する中近世の土墨ではないかと考えていた。事実、調査の結果、古墳の墳丘は南半部はほとんど削平され、北半部はその上にさらに土盛をして土墨として利用した形跡を確認した。また、調査で出土した遺物の中には古代末の瓦も数点みうけられた。

(2) 墳丘及び周堀

墳丘は南部分が削平をうけており、なおかつ、その部分は圃場整備区域外であったため、発掘調査を実施することができず、全体の形状は不明である。発掘調査の所見では円墳ないしは前方後円墳の後円部と考えられた。規模は円墳とするならば直径35m級のものとなろう。また、墳丘西側の中段には円筒埴輪列を検出した。周堀は断面逆台形状で上幅 2.5m、下幅 1m、深さ1.4mであり、埋土上面には浅間B軽石（As－B）の純層が堆積していた。

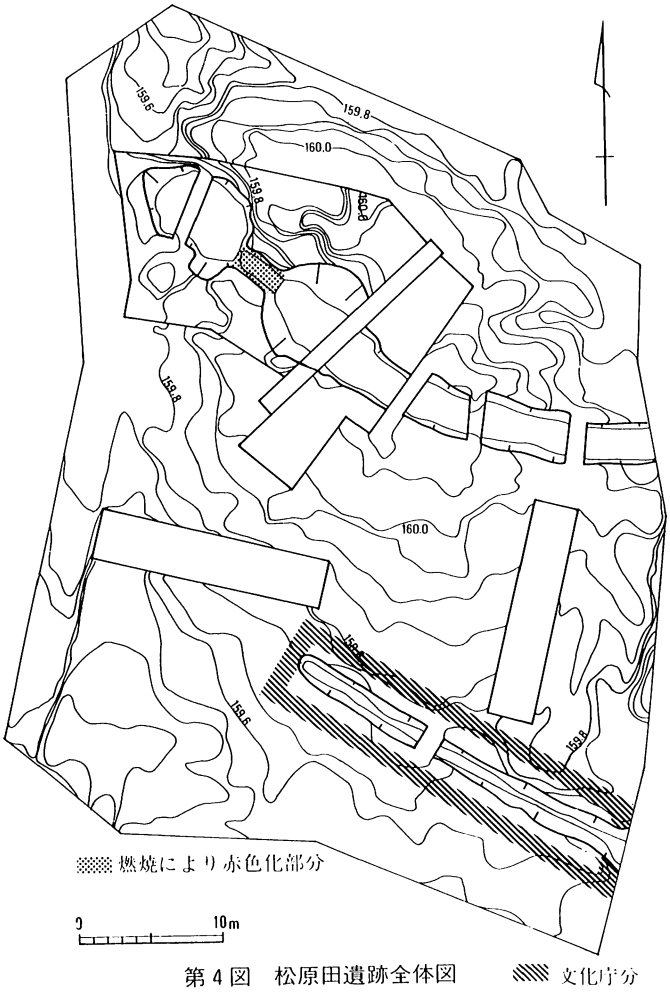
(3) 主 体 部

南に向かって開口する自然石の乱石積による横穴式石室で玄室部の床面と奥壁、側壁の一部を除いて攪乱が著しい。石室の現存長は4.25m、石室幅は奥壁付近で1.30mである。残存する床面や側壁の状態から判断すると袖無型の石室になるものと考えられる。

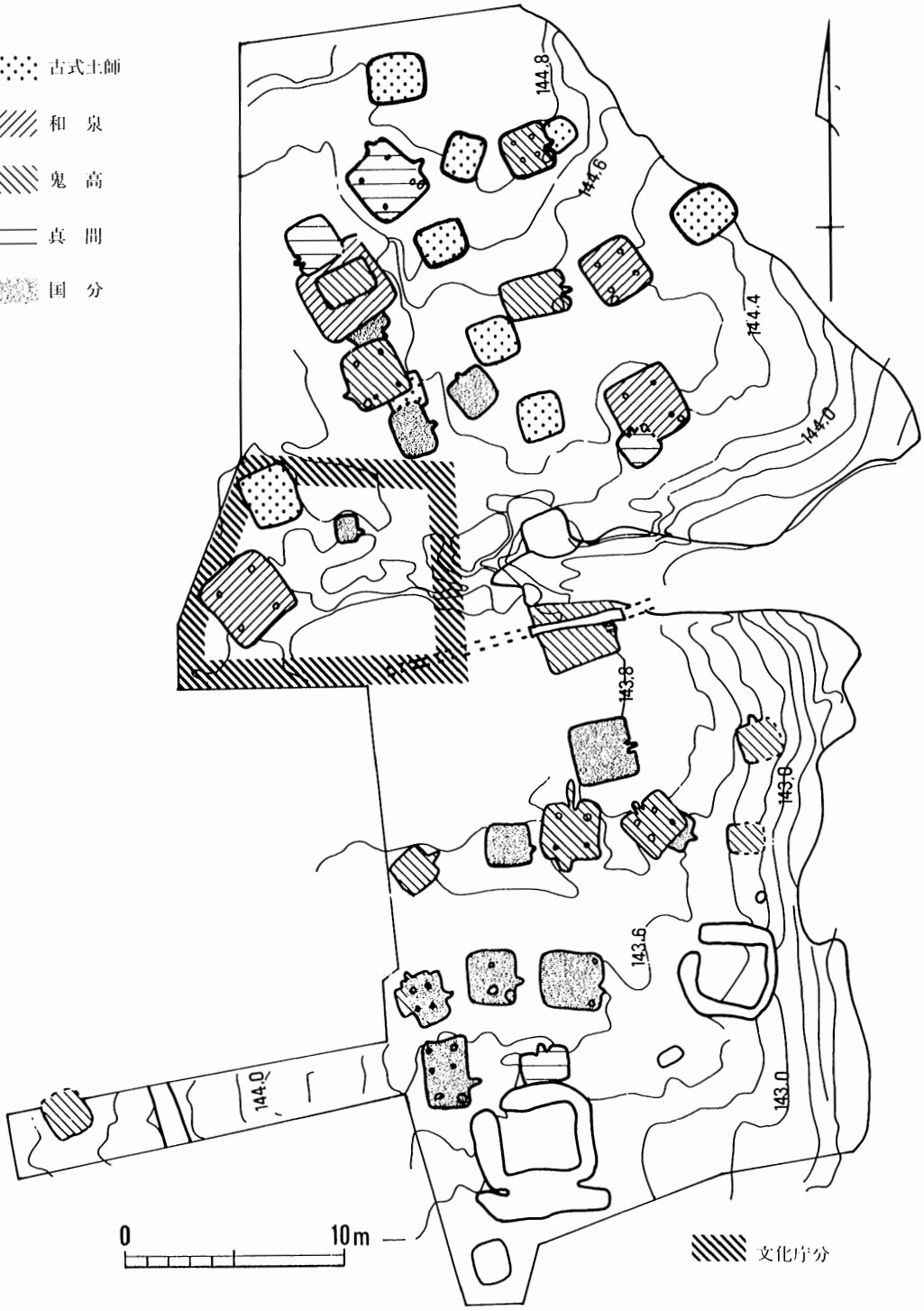
床面はローム層の地山を掘り込み3cm前後の小円礫を敷きつめている。

(4) 出土遺物

墳丘からは円筒埴輪や形象埴輪（太刀）の一部が出土している。また石室内からは直刀、鉄鏃、耳環などの鉄製品のほかに水晶製の切子玉、棗玉、碧玉製管玉、ガラス小玉などの玉類が多く出土している。



第4図　松原田遺跡全体図　　文化庁分



第５図　三ヶ尻遺跡全体図

III 昭和60年度調査の成果

今年度は深津西迎、三ケ尻、松原田地区を対象として調査を実施した。その結果、集落遺跡３と生産遺跡１を確認、調査した。

西迎Ｂ遺跡では赤城山南麓地域ではこれまで類例の乏しかった、弥生時代中期後半の集落を確認した。弥生時代中期後半にはすでに粕川村に初期農耕集落が形成されていたのである。しかも、その集落は15軒からなり、極めて大型の住居が存在している。このことは、これまで小規模な形でしか確認されていなかった赤城山南麓における初期農耕集落の在り方に一石を投じるものである。

西原遺跡では弥生時代後期後半の環濠集落を検出した。これは赤井戸式期終末期に該当するもので、当該期としては初めての検出例であった。今回の発掘調査は部分的なものであったが、試掘調査によって、環濠の状態や環濠内の住居の在り方など、ほぼその全体像を把握することができた。このことは、これまでの県内における清里庚申塚遺跡、浜尻遺跡などに代表される弥生時代中期後半の環濠集落がいずれも部分的確認例であったのに対して、今回の調査は県内では初めてのこととなった。また、今回の調査は赤井戸式期の再認識にもつながるものであろう。

三ケ尻遺跡では古墳時代前期の住居が比較的まとまって検出されたが、それらはいずれも小型のもので、出土遺物も少なく、炉跡や柱穴などもほとんど付設されないというものであった。これまでの粕川村の発掘調査の成果からは、竪穴式住居に大型住居と小型住居という二者が併存するのは古墳時代中期以降ではないかと考えていたが今回の調査例によって、その形成が一時期溯ることとなった。

松原田遺跡では製鉄遺構が確認された。粕川村ではこれまでまったく検出例のなかったものである。周辺には59年に調査を実施した西原遺跡の木炭窯やタタラ沢という地名が残っていることから古代からの鉄生産地としての可能性が強い。これは「粕川村の古代」の新しい側面でもある。

以上、今回の調査では粕川村南部の深津地区が極めて、伝統的な農耕集落地域であることが、あらためて確認されるとともに、鉄生産という粕川村の新たな一面を知ることができた。

61年度は再びこの深津地区の調査にあたることとなる。調査にあたっては以上のことを念頭にいれて発掘調査にあたっていきたい。

図版１　西迎Ｂ遺跡出土の弥生時代中期後半の土器

図版 2

西迎Ｂ遺跡遠景（北から）　右上は三ケ尻遺跡

西迎Ｂ遺跡　作業風景

西迎Ｂ遺跡13号住居　全　　景

西迎Ｂ遺跡13号住居　埋設土器

図版 4

西迎B遺跡11号住居　遺物出土状態

西迎B遺跡28号住居　遺物出土状態

西迎B遺跡 8 号住居　遺物出土状態

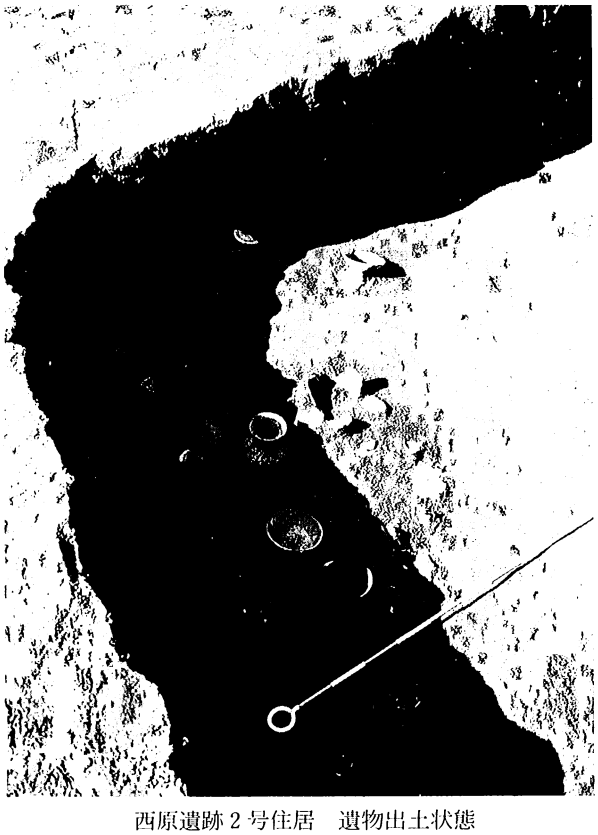
西迎B遺跡 4 号方形周溝墓　全　　景（北から）

図版 6

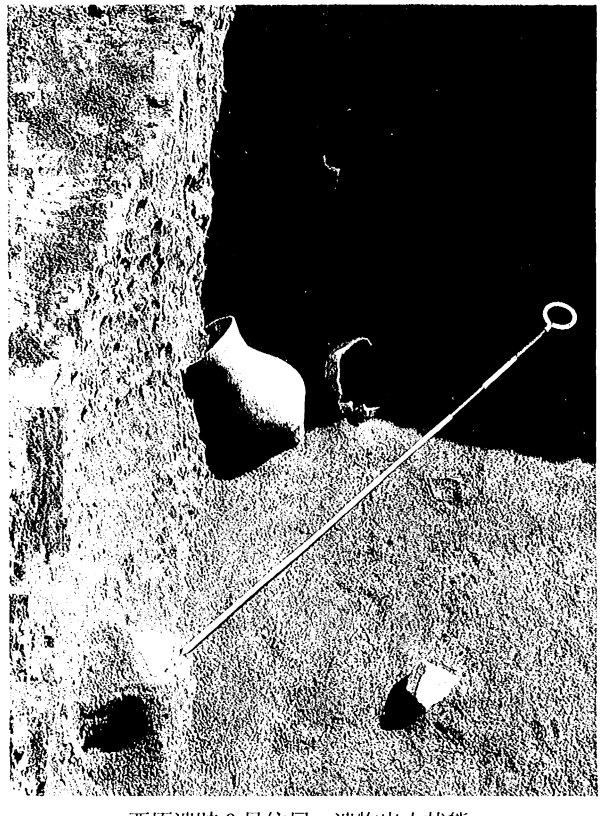
西原遺跡　全　　景（北から）

西原遺跡環濠　埋土浅間C軽石堆積状態

西原遺跡 2 号住居　全　　景



西原遺跡 2 号住居　遺物出土状態



西原遺跡 3 号住居　遺物出土状態

図版 8

三ケ尻遺跡33号住居　全　　景（上は35・36号住居）

三ケ尻遺跡10号住居　遺物出土状態及び 7 号住居作業風景

三ケ尻遺跡37号住居　遺物出土状態（南から）

三ケ尻遺跡１号方形周溝墓　全　　景

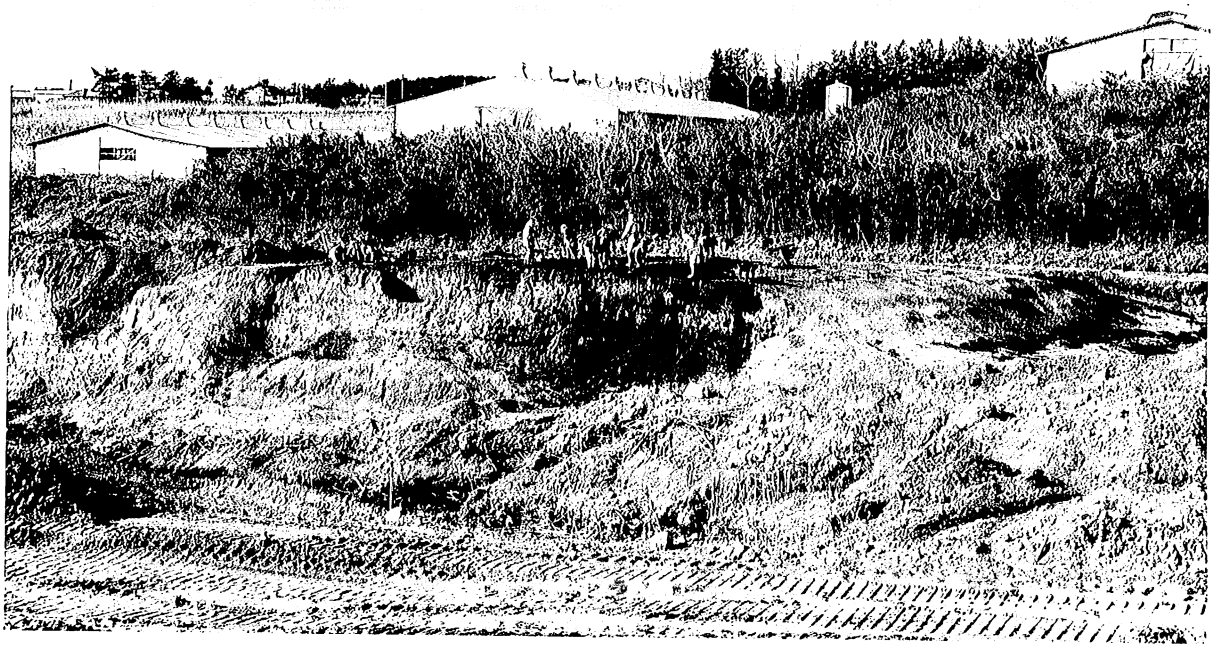
図版10

三ケ尻古墳　全　　景

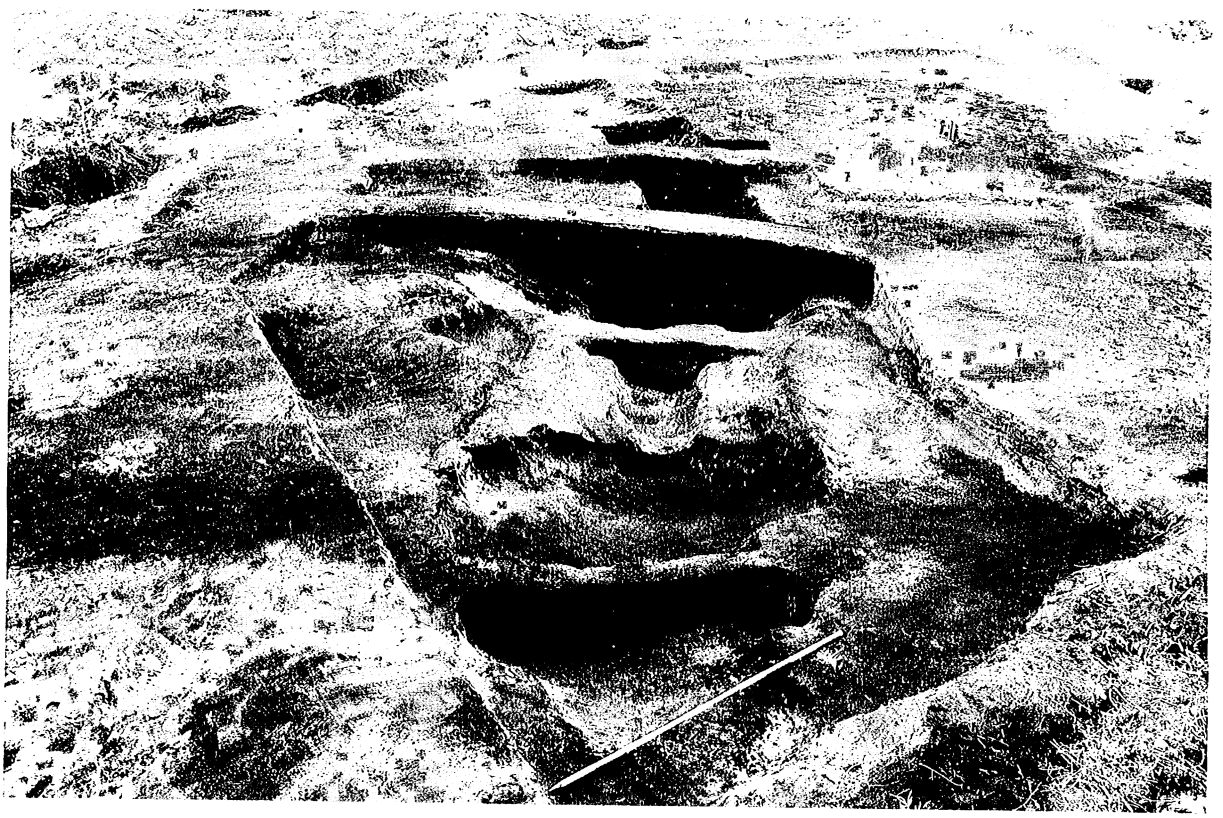
三ケ尻古墳　円筒埴輪配列状態

三ケ尻古墳　石室部全景

三ケ尻古墳　石室内遺物出土状態



松原田遺跡　遠　　景



松原田遺跡　製鉄遺構全景

付　　篇

西　迎　遺　跡　K1

1. 発掘調査の経緯

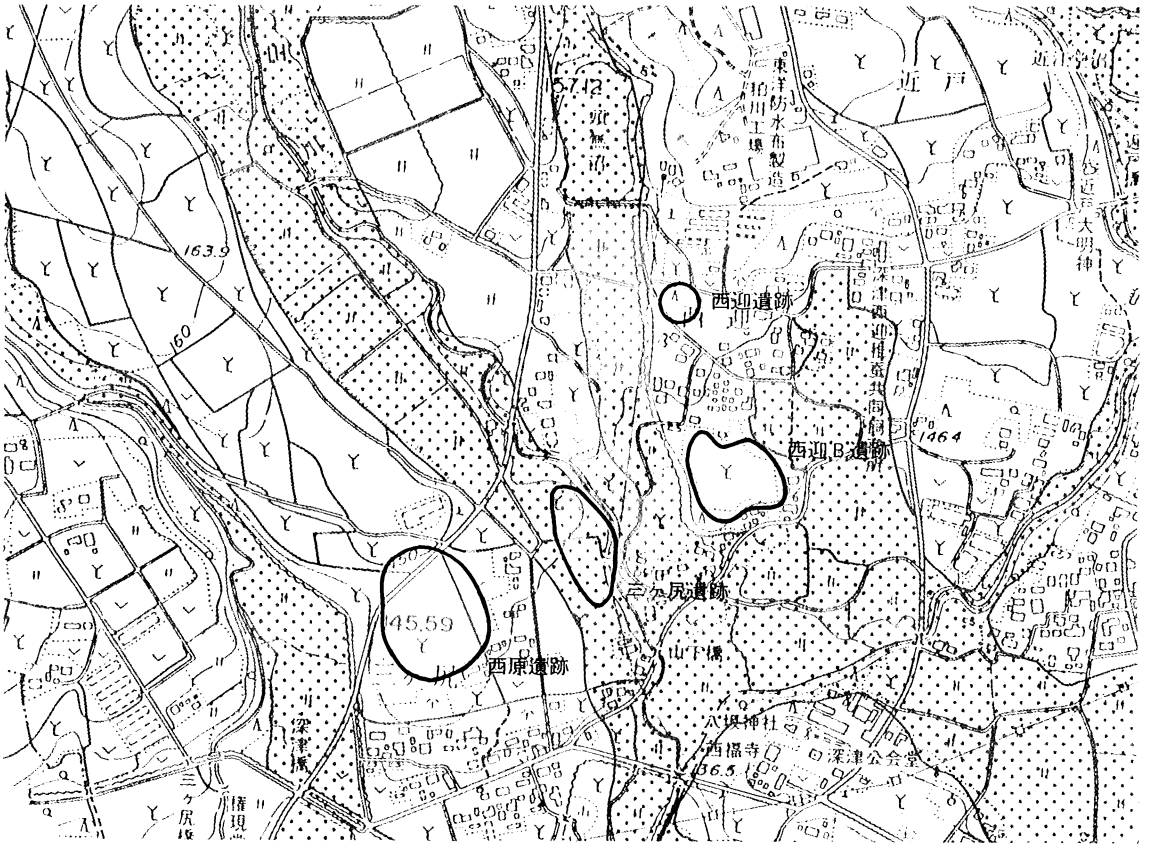
西迎遺跡は粕川村大字深津字西迎1280―3番地他に所在する。

粕川扇状地面に残丘状に残る洪積台地の西端に位置する。標高は154mである。遺跡の西側は湧水の開析による谷地となっており、谷頭部分には、近世以来、頭無沼と呼ばれる用水池がある。遺跡と谷地との比高は10m程ある。遺跡の周辺には聖天古墳群と呼ばれる古墳時代後期の群集墳が存在している。また、遺跡の南100mには、西迎の集落を挟んで昭和60年度に調査を実施することとなる西迎B遺跡が在る。

本遺跡の発掘調査は、その後、村全域にわたって実施されることとなる県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査の先鞭をつけるものとなった。また同時に、粕川村教育委員会が独自に実施する初めての発掘調査であった。発掘調査は昭和54年8月6日より8月17日までの11日間実施した。調査担当は当時、粕川小学校に勤務していた都丸肇氏にお願いし、小島が補佐した。

遺跡発見の端緒は、昭和54年6月頃、地主である荻野清作氏によって粕川村教育委員会に一連の完形土器が運び込まれたことによる。荻野氏によれば自宅の庭の隅にゴミ穴を掘るに際し完形土器がまとまって出土したという。教育委員会では、この後に控えている圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査への準備も兼ねて、遺物の出土地点の性格を知る目的で発掘調査を実施することとした。

調査は荻野氏が土器を発見した箇所を中心として発掘区を設定し、順次拡張していくこととした。しかし、耕作による土壌の攪乱が激しく、わずかに発掘区北西隅で住居のコーナーの一部と考えられる壁の立ち上りと壁周溝、炉跡を確認したのみであった。ただ、出土遺物については、荻野氏の掘った穴の周辺や壁周溝内、炉の周辺から多く確認することができた。



第1図　昭和60年度調査遺跡の位置

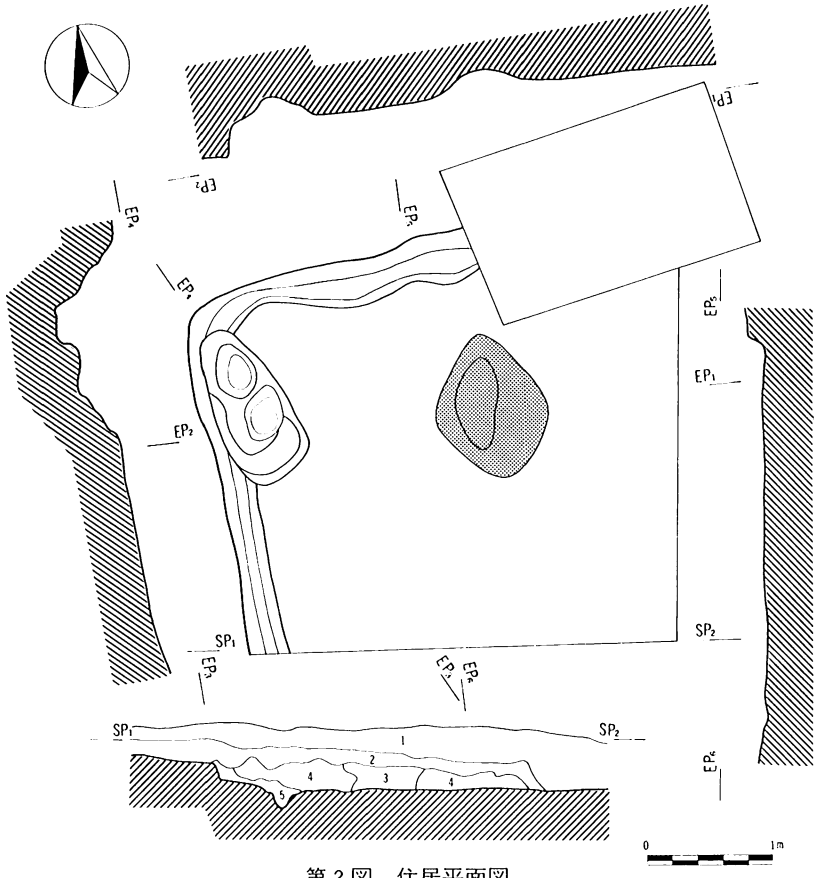
2. 遺構と遺物

確認した遺構は、住居の北西の隅部分であると考えられる。攪乱が激しく全体形を捉えることができなかったが、荻野氏が掘った部分は住居の北壁を含む一部であることが判明した。

住居壁下には周溝が廻り、コーナー部分には長楕円形のピットが設けられている。

炉は地床炉であり、炉石は検出されなかった。ただし、住居の大きさから考えると、かなり北壁よりに偏っていることや、焼土層が僅かであり、灰層も伴わないことから、恒常的なものではなかった可能性も考えられる。

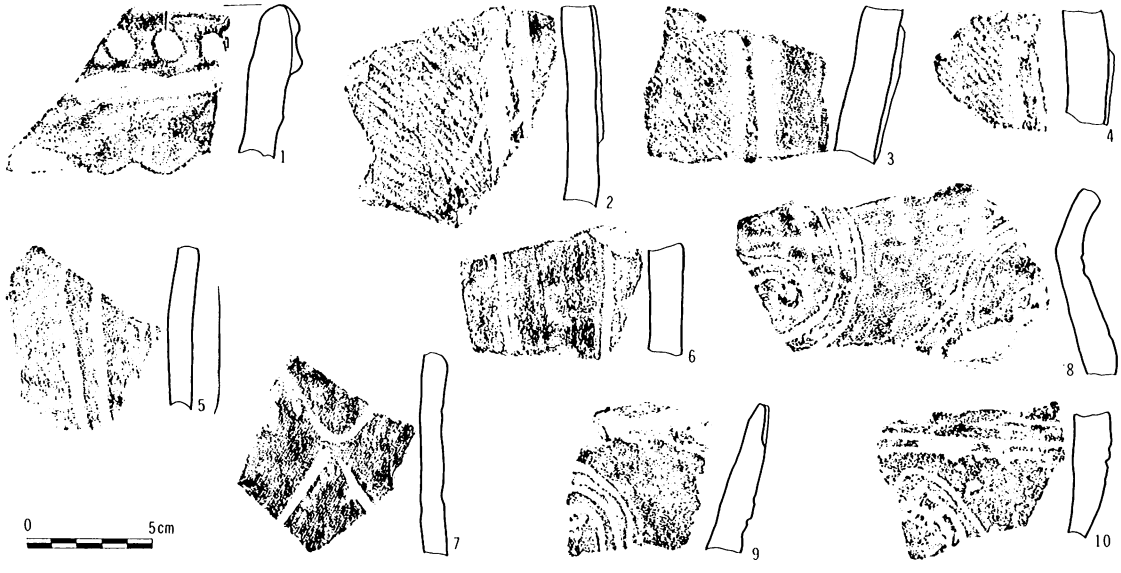
床面は非常に軟弱であり不明瞭であった。



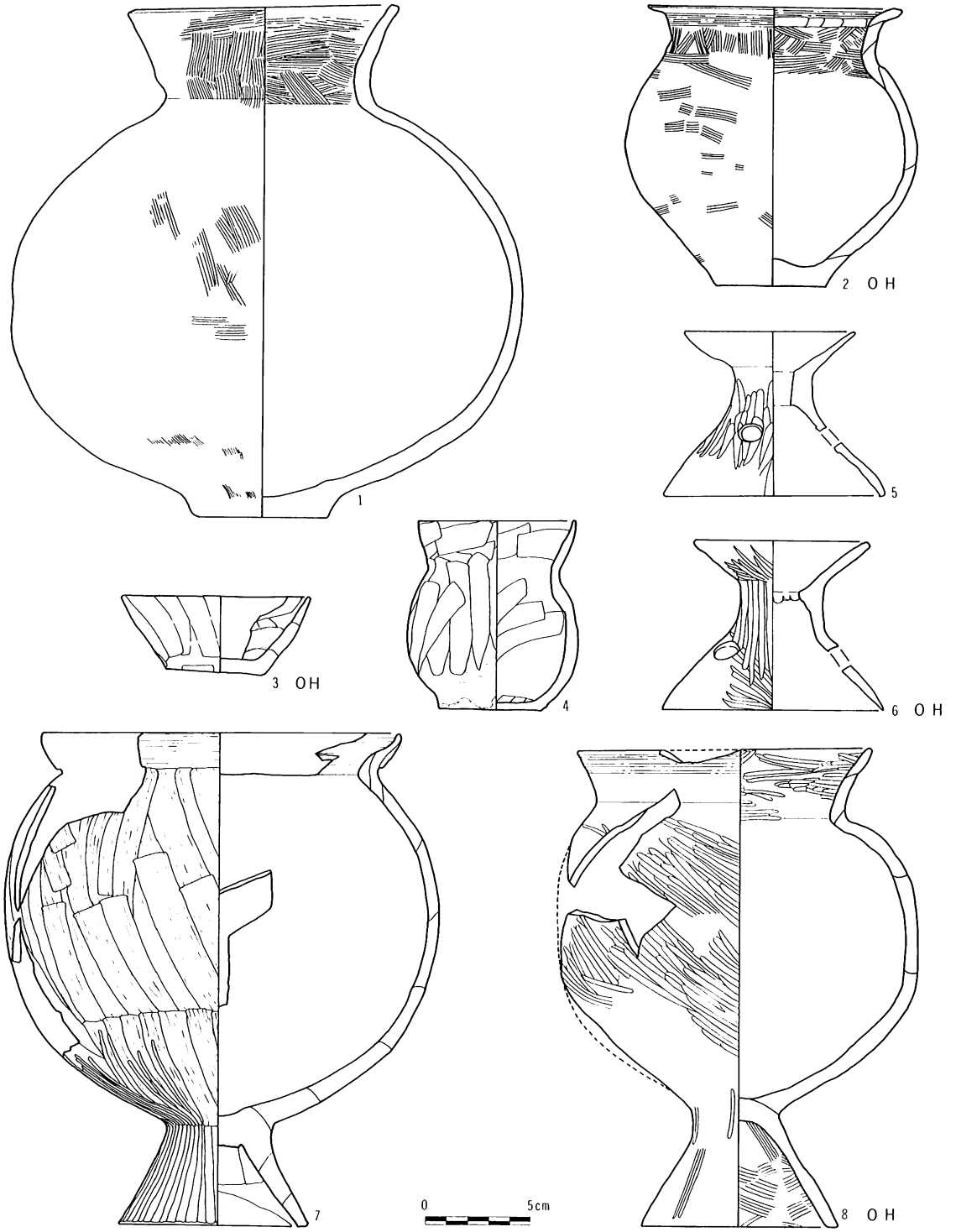
第2図　住居平面図

土層説明

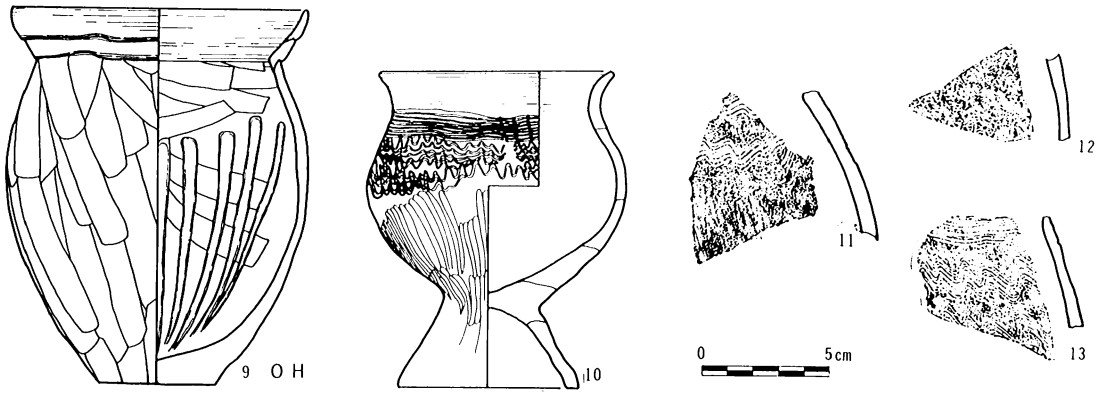
1．攪 乱 土
2．耕 作 土
3．黒褐色土　C軽石を多く含む。しまりなくボソボソしている。
4．褐 色 土　C軽石を多く含む。
5．黄褐色土　ローム土の2次堆積土である。



第3図　調査地区表採の縄文土器



第４図　住居出土の土師器(1)



第５回　住居出土の土師器(2)

出土遺物は荻野氏の発掘品５点（図中にＯＨと記載）を含めて、完形品10、破片３であった。

1．**壺**　やや下脹れの、胴の張る球形状の胴部と「くの字」に強く外反する頸部を持つ。底部は小さく突出している。口縁部は頸部から直線的に開く。外面調整は胴部については細かな刷毛状工具による調整の後、箆磨き、口縁部は胴部と同じ刷毛状工具による縦方向の調整をそのまま残し、口縁端部は横撫が加えられる。内面調整は器面の荒れが激しく不明。胎土には僅かに砂粒を含む。焼成は良好。器面には黒斑が有る。色調は明褐色。口径12.8、頸部径9.7、胴部最大径24.1、底径6.15、器高24.2。

2．**広口甕**　胴部は中央部に最大径を持つ球形状である。頸部は短く、胴部から緩やかに立ち上がる。口縁部は短く、急に大きく外に折れ、頸部から口縁部に至る断面形は「コの字」に近い形を呈している。また、胴肩部と頸部との境には接合痕を残している。外面調整は胴部については横方向の刷毛目調整、頸部は縦方向の刷毛調整である。また器面は荒れが顕著であり、器壁の剝落がめだつ。二次焼成によるものか。内面調整は胴部は良く箆撫が施されている。頸部には刷毛目を残す。口縁部は横撫。胎土には砂粒を含む。焼成は良好。色調は明褐色である。口径12.1、胴部最大径13.7、底部径5.25、器高13.3、荻野氏採取遺物。

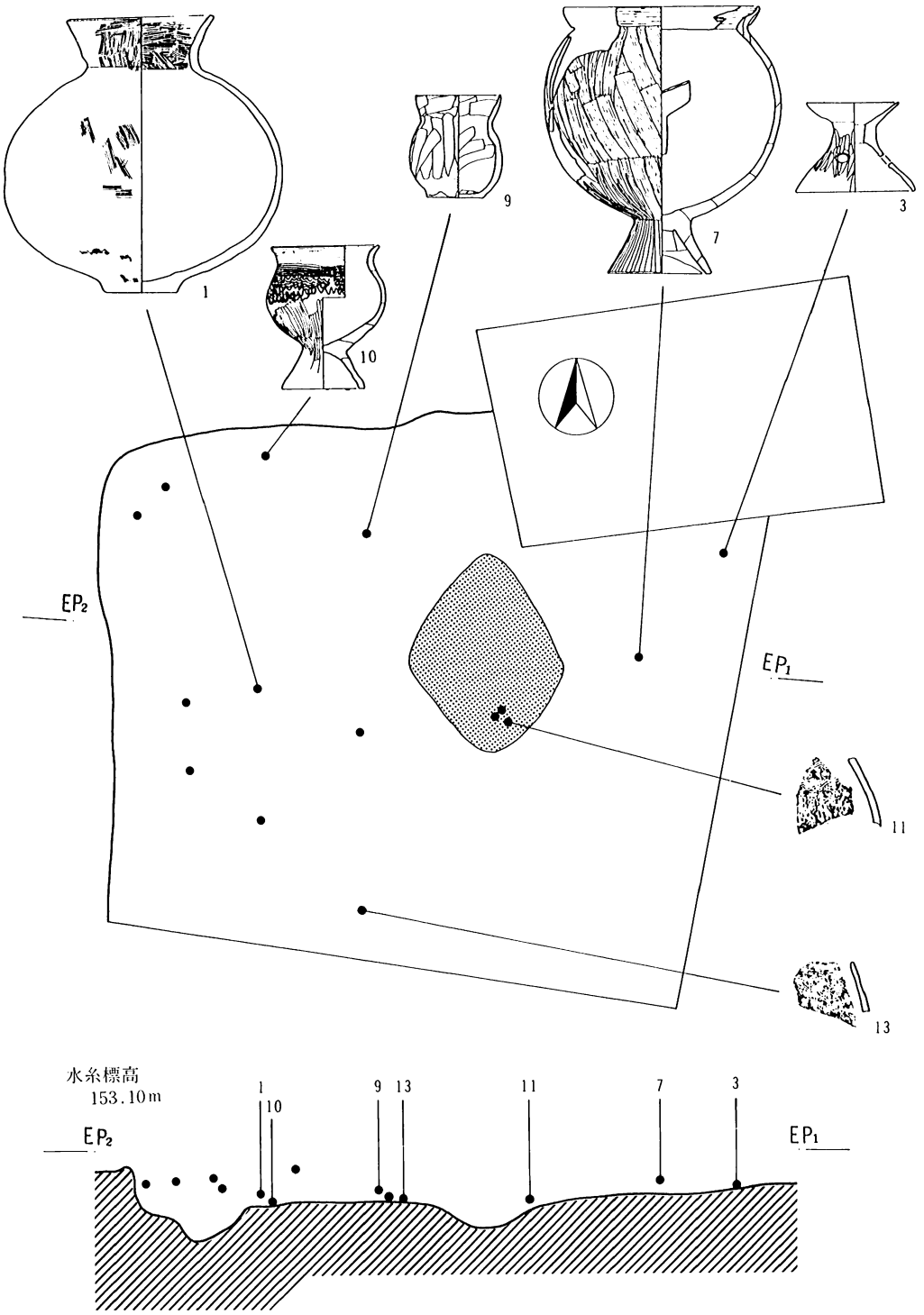
3．**小型杯**　平底の底部と直線的に開く口縁部を持つ。器壁は薄い。調整は内外面ともに細い箆状工具による撫で調整。一部に指による圧痕を残す。焼成は良好。色調は赤褐色。口径8.95、底径4.6、器高3.7、荻野氏採取遺物。

4．**小型坩**　胴部はやや下脹れの球形状を呈する。底部は胴部径に対して比較的大きい。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。外面調整は箆削りの後荒い磨き、内面は胴部は撫、口縁部は荒い刷毛状工具による撫。全体に整形や調整は粗雑である。胎土には砂粒を含む。色調は淡赤褐色。口径7.5、胴部最大径8.05、底径4.85、器高8.8。

5．**小型器台**　器受部と脚部が直線的に開くもので、器受部と脚部との接合部が厚い。器受部に対して脚部の径が大きい。脚部の透かし孔は３孔である。外面調整は縦方向の細かな磨き。内面調整は荒い撫。透かし孔は外から内へあけられている。胎土は良く精選され焼成も良好。色調淡褐色。器受部径8.1、脚部径10.4、器高7.8。

6．**小型器台**　器受部は直線的に開くが脚部はやや内湾ぎみとなり、器受部に向かって直線的に立ち上がる。器受部と脚部との接合部は極めて薄い。脚部透かし孔は３孔。外面調整は縦方向の磨き。内面は撫か。胎土は精選されているが砂粒を含む。焼成は良好。色調は褐色。器受部径8.2、脚部径10.45、器高8.0である。荻野氏採取遺物。

7．**台付き甕**　胴部はやや上下に潰れた球形である。口縁部は頸部からくの字に屈曲し、やや内湾ぎみに短く立ち上がり、口唇端部をつまみ上げる。わずかに頸部から口縁下端部にかけて段をもつ。脚部は小さく「ハの字形」に開く。外面調整は胴部から



第6図　遺物出土状態図

脚部は縦方向の擦痕状の刷毛目。口縁部横撫。内面は丁寧な横方向の撫。胎土には砂粒を含む。色調淡褐色。外面には黒斑有り。口径17.0、頸部径14.9、胴部最大径20.55、脚部径8.95、器高23.5、脚部高4.8。

8. **台付き甕** 胴部はやや上下に潰れた球形である。口縁部は頸部から直に立ち上がるが端部はやや外反ぎみとなる。口縁部は比較的高い。脚部は直線的に「ハの字」状に開く。外面調整は細かい縦から斜め方向の篦磨きが顕著である。内面は口縁部は横方向の篦磨き、胴部は丁寧な撫、脚部は横方向の刷毛目調整が施される。胎土は精選され、焼成は良好。色調は淡褐色。外面下部には吹きこぼれ痕が残る。口径13.9、頸部径11.7、胴部最大径17.05、脚部径9.3、器高22.75、脚部高5.25、荻野氏採取遺物。

9. **甕** 胴部はやや上下に延びた球形である。口縁部は短く、頸部から緩やかに外反しながら立ち上がり、端部でやや内湾する。また、二段にわたって接合痕を残す。外面調整は縦方向の篦削り。内面は縦方向の篦による撫が施される。全体に調整、整形とも粗雑である。胎土には砂粒を含む。色調は淡黄褐色。口径11.65、胴部最大径11.95、底径4.6、器高14.9。荻野氏採取遺物。

10. **小型台付甕** 胴部は上下に潰れた球形で、口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。脚部は「ハの字」状に開く。頸部には三連止の簾状文を四単位施す。胴部上半部にかけては頸部と同一工具による櫛描波状文が施されている。器面は内外面ともにかなり荒れている。外面調整は横撫。胎土には砂を多く含む。色調は淡褐色。口径9.35、頸部径8.2、胴部最大径10.25、脚部径7.1、器高12.25、脚部高3.2。

11、13は同一個体と考えられ、かなり大型の壺の一部と思われる。櫛描の波状文と簾状文が施されている。胎土は精選されている。色調は淡褐色。12は櫛描の波状文が施されたもので、胎土は砂を多く含む。色調は赤褐色。

以上の遺物は、第6図の遺物出土状態図より、同一遺構からの一括出土遺物として捉えることができる。しかも、これらの遺物には弥生時代後期の樽式土器の系譜や赤井戸式土器の系譜に連なるものと古式土師器の系譜に連なるものという3者が混在している。

この資料が確認された当時では、これらと同様な様相を示す資料の報告例はほとんどなかった。その後、粕川村内でも赤井戸式土器の良好な一括資料が検出され、一部の資料は、本遺跡の出土資料と同様な様相を示すものが増加した。他の近接市町村の調査でもこれらの資料は増加しつつある。小島はこれらの資料について、赤井戸第Ⅲ期という編年的位置付けを与えたことがある。これは明らかに在地の土器の系譜の中で位置付けることができないものをその一括遺物の中に含む資料を、それまで弥生時代を樽式土器・赤井戸式土器、古式土師器をS字状口縁台付甕に代表される石田川式土器というような考え方に対して、確実に古墳時代にまで弥生土器が残るということを示したものであった。

本一括資料についても同様な評価が与えられるだろう。ただし、第4図2の広口甕（壺？）や第5図9の甕については赤井戸第Ⅲ期としたものより後出のものと考えられる。

ま と め

この昭和54年に実施した西迎遺跡の発掘調査は粕川村にとって画期的なものとなった。この発掘調査をステップ台として、以後8年にわたって実施することとなった圃場整備事業にかかる埋蔵文化財の発掘は、他の市町村に負けることのない実績を上げることができた。粕川村教育委員会にとっては記念すべき発掘第一号である。

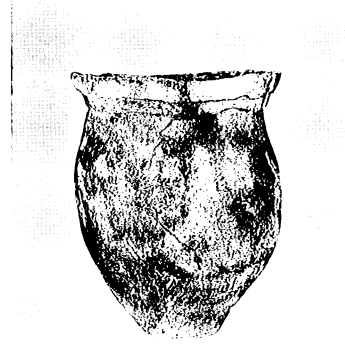
調査にあたり土地発掘の御理解と御協力を賜った地主の荻野清作氏、調査中、さし入れなどを戴いた中島政男氏に心より御礼申し上げる。また、炎天下のなか調査に参加していただいた北爪市郎、宮崎高志、笠原嘉子、渡辺賀津子、高橋昌志の諸氏にはここに記して感謝申し上げます。

図版 1

発掘状況

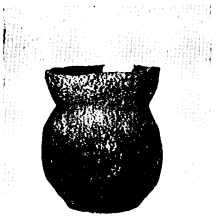
1号住居全景

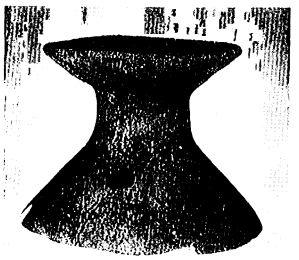
遺物出土状況

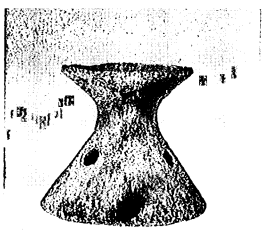


出 土 遺 物

図版 3







出 土 遺 物

深津地区遺跡群
——昭和60年度県営圃場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査の概要——
付篇　西迎遺跡K1

昭和61年2月1日　印刷
昭和61年3月31日　発行

編集
発行　粕川村教育委員会

印刷　朝日印刷工業株式会社